

スターチスの病害虫防除

JA 紀州 御坊営農販売センター 営農指導員 平野 吉浩

【はじめに】

スターチス（リモニウム）は、イソマツ科の一年草および多年草で、乾燥に強く湿気を嫌う性質が有ります。花色が豊富でアレンジやドライフラワーとして人気です。

和歌山県内栽培概要

8月	9月	10月～6月
△	□～□

△定植 □収穫

【主な病害】

●褐斑病

Cercospora insulana という糸状菌によるごく一般的な病害です。農薬防除により十分防除は可能です。比較的高温多湿で発生しやすくなります。病斑の特徴は不正型で、大型病斑になると輪紋状になり、当産地では定植直後の秋雨時期に発生が多いです。

〔対策〕

定植直後から農薬の予防散布を行うとともに排水対策および換気を心掛けます。予防剤を散布することで比較的容易に対策することが可能です。



褐斑病

●萎凋細菌病

Burkholderia caryophylli による細菌性の土壌伝染病害でありスターチス栽培において最も重大な生産阻害要因です。発病時の特徴として初

めは下葉の一部で主脈を境に半葉が黄化し、次第に葉脈に血管が浮き出たように赤変します。

〔対策〕

排水対策を行うとともに敷き藁などで地温を抑え、さらに太陽熱消毒や薬剤による土壌消毒を行います。ただし、殺菌には40～45℃以上で12日間以上の処理が必要なので地温をしっかり確保することが大切です。



萎凋細菌病

●灰色かび病

Botrytis cinerea という糸状菌による病害です。当産地では気温の上昇してくる初春から発生が増加し、開花期間中発生し続けます。特に多湿により発生しやすいです。

特徴としては株元地際部に灰色の菌糸と胞子が発生し、花梗や花弁にも不整形の病斑を形成します。

〔対策〕

株元の枯死葉は伝染源となりやすいので、除去して下さい。施設内の換気を行うとともに、農薬による予防も行して下さい。農薬を使用する際は抵抗性がつくこともあるため異なる成分の農薬をローテーション散布して下さい。



灰色かび病

●てんぐ巢病

ヒメフタテンヨコバイが媒介し、植物の樹液を吸うことによりファイトプラズマ（植物病原細菌）が伝搬されます。ただし、ハサミや接触による伝染はしません。感染すると萎縮や叢生、葉化症状がみられます。

〔対策〕

発病株を早期に抜き取り、焼却するか地中に埋めます。ヨコバイを防除することで感染を予防することが可能です。



てんぐ巣病萎縮症状



てんぐ巣病叢生症状

【主な害虫】

●ヨトウムシ類

主にハスモンヨトウやシロイチモジヨトウが食害します。定植後の秋に発生が多くなります。

食害痕は数か所あり、周辺に黒っぽい糞が見られるのが特徴で、葉をめくると裏側に幼虫が隠れていることが多いです。

〔対策〕

ハスモンヨトウでは、葉に細かい食害痕が見られ、糸をはきながら分散を始める若齢期が防除適期です。シロイチモジヨトウでも若齢幼虫によって新葉が綴られている時期に防除します。また、薬剤抵抗性がついた個体もあるため、異なる成分をローテーションします。

また、栽培初期より性フェロモン交信攪乱剤を用いて次世代の幼虫発生を抑制する方法もあります。

●アブラムシ類

定植後の秋や春に発生し、下葉に発生しやすいです。ハウス内では、発生すると増加しやすく、多発するとすす病も併発するため、早めに防除する必要があります。

また、ウイルス病も媒介するため初期からの予防が必要です。

〔対策〕

定植時期が早いほど飛来が多いので、定植を遅らせます。ハウス周辺の雑草は発生源となるため除去し、ハウスの開口部に寒冷紗を張って、侵入を阻止します。圃場内に数か所発生が認められれば速やかに防除を行います。